

「このお祭りは何と読むのですか」白髪の高齢紳士が尋ねてきた。法被を着た実行委員をつかまえ問い合わせて「いおがみさいです」と。地元飯玉神社の五穀豊穡を願うことを趣旨としたお祭りだとか。

40代後半の地元中学の同窓生が、地域で交流の場を作りたいと始まった手作りのお祭りだ。実行委員長はイベント関連の仕事をしている47歳橋本さん。皆を引っ張るリーダーであり、今年8月に一般社団法人格を取得した「つなぐまち広瀬の会」の理事長である。

稲祖上祭が始まった3年前と同時期、広瀬団地の建て替え計画を進める群馬県・前橋市・住宅供給公社の3社は、建て替えを進めるためのビジョンをまとめる作業に入っている。前橋工科大学堤教授や地元自治会にも呼びかけ、3度にわたるワークショップを開催し取りまとめたのが「広瀬団地再生ビジョン」だ。そしてこのビジョンを実行していく受け皿としてつくられたのが「つなぐまち広瀬の会」。この会の構成が面白い。地元自治会長、郵便局長、飯玉神社宮司、前橋市建築住宅課、群馬県住宅政策課、建設会社、地元企業、工科大学学生、工科大学堤ゼミから排出された卒業生が務める都市再生のNPO法人、ビジョン作成を担ったコンサル、小学校教師。

単身高齢者、身寄りなき者が増加していく中、安否確認を含めた見守り事業をどうすすめていくのか、協同福祉会は考えてきた。公営団地における高齢化・単身化が顕著な中、つなぐまち広瀬の会とつながりを持ったのが、今年4月。そこからお互いの目指すものを共有してきた。そしてこのお祭り。

実際参加させてもらい、月並みだが「感動」した。働き盛りの地元中学同窓生の「地域の交流を」という想いが、こうして実現している。子どもからお年寄りまで多くの方がイベントに足を運んでいる。信号から信号までの一区画だが、歩行者天国になり、コンパクトだが、顔と顔が見える、本当に地元のお祭りだった。「この神社、こんな風に地元を開いた神社なんてないですよ」実行委員の方は言っていた。確かに（飯玉）神社が地域の交流拠点になっているところは僕も初めて聞いた。宮司さんのまちづくりに対する想いの表れだろう。

参道にブースを出した協同福祉会は、困ったら気軽



に相談を、というポケットティッシュ、子どもには
飴入りチラシを配布した。参道に行く住民は、子ど
も連れも多いが、障害を持つ人、外国人、高齢者
など多様な世代である。広瀬団地の特徴を改めて
垣間見た気がした。

「困ったら気軽に電話を」という声かけに、「どこの
施設だい？」「困りごとだらけだよ」などの声が多く
聞かれた。中には二人の障害児を持つお父さんから
「障害児のショートステイというサービスはありま
すか？」という問い合わせや「戸建てに一人で住
んでいるので、家を売って見守りしてくれるサービスを探しててる」という相談も寄せられた。
「去年は苦情ばかりに対応する祭だったんすよ。今年は1件も苦情がない」
笑いながら語る実行委員長の言葉に、このお祭りの意義が凝縮されているように感じた。

